

二十六歳の補充兵

海没・比島戦で生還

秋田県 松橋 進

大正七（一九一八）年三月二十日、秋田県北秋田郡阿仁町比立前という所で生まれた。父は東北電力に勤めていて東北各方面を転々と勤務し大館へ来た。私は七人兄弟の長男であり、姉と妹と男五人であるが、当時は現在と違ってどの家庭でも子供が多かった。

私は父の勤務の関係もあつたためか、高等小学校卒業後昭和十四（一九三九）年、電力会社の秋田の本社に入り、以来各地を勤務して歩くという、父と同様な勤務の連続であり、現在八十三歳で、健在である。

昭和十三年徴集兵として検査を受けたが思ひかけず丙種合格とされた。その年は北海道小樽に奉公に行っていて、五月に帰郷、七月に検査を受ける二カ月前、米を背負ってギックリ腰となり一カ月入院した。退院

してすぐに検査を受けたのであるから、内臓は悪くなかったが体力的には落ちていたのであろう。検査の三番であつたが、前の一番・二番は第一乙種、私は「丙種合格」と言われびっくりした。少なくとも第二乙であらうと思つていたのでから……。

丙種となつたが、支那事変が始まつていたし、昭和十四年正月頃、叔父に相談し自宅に帰り、東北電力、当時は大日本電力秋田事務所内線係に勤務することになった。昭和十五年二月に矢島町の大川端発電所に転勤となる。ここは水力発電所だから山の中であつた。

昭和十七年に上郷村の配電の散宿所が事務所で、そこに勤務した。昭和十九年二月に、点呼がある。丙種ではあるが、検査官に「気合が入っている」と褒められ、同年四月二十日、召集令状が来て、盛岡の工兵隊に入隊した。二十六歳であつた。

入隊した所は、内務班ではなく外務班であつた。盛岡工兵隊の外に建物があり、人数は三十五人位いた。歩兵と違い工兵隊であるから、東北（弘前師団管区）の者ばかりでなく北海道その他の県からも集まつてい

た。教育は毎日野外に出て行われ、兵隊としての訓話とか、基本的な教練で、過激な演習は無かった。私は二十六歳の初年兵なので年配の方であったが、仲間は第一乙・第二乙の人で皆召集兵であった。昭和十九年五月一日まで、外地転属要員としての軍事教練をうけたのである。

五月二日、盛岡を出発、三十五人の召集兵だけで、博多に着き乗船、釜山に上陸したがその間潜水艦出没の情報は無く、無事に無蓋貨車に乗ったが、他の部隊や一般民間人とは別々で我々仲間のみ単独で朝鮮半島を北上したのであった。

鮮満国境を越え牡丹江省綏要工兵隊、第六三三部隊第二中隊第七班に入隊し本格的な初年兵教育を受けたのである。教育は内地の訓練とは違い、工兵としての教育であるから、爆破作業、架橋、舟艇もやった。まさに実戦さながらの厳しさというか、危険を伴う、一瞬の油断も許されぬ教育訓練であった。私は発電所にいたから、この訓練に類した仕事もしていたため、上官から褒められた。他の人は山形や東北の農業の人が

多かった。我々は第二中隊の第七班で、三十六人位だが、各地から来た初年兵ばかりの召集兵であった。

七月に一期の検閲があり、内地からの慰問団が来て、その時入隊以来初めての外出許可があり、皆喜んでいった。昼前に帰隊の命令が出た。これは部隊に動員命令が出たからである。直ちに出勤の準備、二十四時間以内に準備完了、いつでも出勤できるようにしていた。しかし、その時は情報が入り、すぐ出発はしなかった。

出発日時の変更があったためとのことである。七月二十五日、フィリピン要員として綏要を出発。二十八日、釜山に到着したが、情報によりそこで二、三日待機していた。

八月一日、十三隻の船団を組んだが、我々の船は後から三番目で「ゆうれい丸」という船名なので、私は何だか気持ちの悪い船名だなと直感的に思った。

私は、船には乗ったが、体の調子が悪く、甲板に出て、昼夜共監視役をしていたら夜中二時過ぎ軍医が

「松崎、船艙に入って休め」と言われ横になっていたら、夜明けに「ドカン」と大きな音がしたので、服を着て鉄帽を持ち甲板へ出たら、やられて倒れている人が多い。はじめは空襲かと思ったら、魚雷にやられたのだと聞かされた。本来なら轟沈であるのだが、浅瀬であったため、船は六時間程流されたのである。

もし私が甲板にいれば爆風で飛ばされ死んだか、海に投げ出され死んだであろう。甲板上は血だらけの死骸や負傷兵である。私はちょっと具合が悪く、軍医の白鳥少尉から「下で休め」と言われなければ、私は死んでいただろう。現に、甲板上に居て監視をやっていた人達は、死んだか爆風に飛ばされたのだから、この二、三時間の間で、私や、甲板勤務の人の生死が決まったのである。戦場という所はこのように厳しい所だと痛感したのである。

十三隻の船団のうち、前から二隻目が轟沈だったという。場所は台湾沖であった。船から三角に組んだ竹の筏を下ろし、それに五、六人が一緒につかまって流された。船は三分の二位が沈んでいたから、浅瀬で

あったようだが、その時は分からなかったから沈没すると思つて、ロープにつかまって海上に下りたのである。轟沈した二番目の船はもちろんだが、我々の輸送船でも多くの人が死んだようであった。

あちら、こちらの筏に乗った者達は海流に流されていたが、我々は台湾の丸木船が来て運良く台湾の人に助けてもらった。私は病人であるというので台湾の病院にすぐ入院した。そして、船で助かった人達は部隊ごとに集まった。

何人位入院したか、その時は分からなかったが、入院してから「残るか、行くか」と言われたが、「私は行くつもりで出発したのだから」と言つて、二十三日に退院して、二十四日に海軍の徴発船（明治三十七年建造というボロ船であった）に乗ったが、この船は廃船予定の船であった。

九月十日、フィリピン、北サンフェルナンド港に上陸、十六日間の夜行軍でマニラまで行つた。被服は支給され、兵器も九九式歩兵銃という当時の新式銃が渡

された。そして、マニラで警備についた。

十月二日、サントトーマスへ移動し、自分の工兵隊のみが集まって行軍した。第六三三部隊は一緒に行った部隊で、十一月から、私は通信の技術があったため本部勤務となった。

各中隊との有線通信の交換器の係だから、重い交換器を背負って歩いたのである。そのうち、リバー飛行場にいたが、連日空襲を受ける。しかし、不発弾があちこちにあり危険であるので、私は不発弾の誘発作業に当って歩いていった。

戦争そのものは厳しいものであったが、まさか、まだ負けるとは思っていなかったで、何とか敵を食い止めようと勤務していた。不発弾は、一メートル位の穴があいている。そこで、不発爆弾を全部集めて一緒に誘発させるという作業だから危険な任務であるが、幸いにして友軍の事故はなかった。

フィリピンでは、一度空襲されると、市場の物価がどんどん高騰する。物資が無くなり、日本軍の敗勢を住民は観察していたし、住民の多くは米軍と内通もし

ていたから、我々より戦争の状況は知っていたのである。それが物価に大きな影響を与えていたのであることは、今だからよく理解される。

しかし、我々、一線部隊の兵隊には戦況などは、目の先の状態位しか分からないのだから、と言うより、その日、その日の戦闘と行軍にすべてを投入しているのだった。

我々には、物資や弾薬の補給は無くなってくるので、市場で、食料等を徴達するより仕方がない。バナナも最初は安かったが、一度空襲されると高くなる。それより、物資が無くなるということは死活に関する大変なことであった。

そのうちに、米軍上陸の情報が入り、正月というのに何も無い、車や驢馬（ロバ）を徴発して、武器・弾薬・食料を持って移動を開始した。最初は山へ退避する。マニラの水源地のダムに入って壕を掘って、何日間かの糧秣を集める。住民の畑など（ほとんどの住民は戦闘を避けて逃げてしまい、ほぼ無人であった）の

野菜を採って食べたりして飢えをしのいでいた。

そのうちに、空襲がどんどんひどくなり、毎日のように五〇キロ爆弾を落され隠れる所も無くなる。山も林も焼き払われてしまし、壕を掘っても、身をかくすこともできなくなって来た。

米軍は、最初に落下傘爆弾を落してくる。不気味なものだった。あれは目に見えて落ちてくるから心理的にも効果があった。我々は昭和二十年の一月五日頃から交戦しつつ移動をしたのである。

マニラも陥落するし、我が第十四方面軍は奥地へ奥地へと撤退していった。我々は直接見なかったが、在留邦人の女性も子供も、老人も皆、軍と一緒に奥地へ奥地へと安全を求めて歩いて行ったという。戦没は軍人ばかりでなく非戦闘員も同様であった。

七月までは、我々の部隊も、毎日、毎日移動する。東海岸に日本の潜水艦が迎えに来るという情報もあり、我が部隊も東海岸に向け山中に入った。

七月三十日、糧食もいよいよ無くなり、皆で残った米を食べ延ばしていた。そのうち食料を食べ残しつ

つ、日毎に餓死する者も出てきた。

米軍は高地へ陣地を作り、日本軍が動いていると迫撃砲を射ってくるので、戦死者が増えてくる。小型偵察機が上空を飛び回っている。日本軍を見つけると、あるいは日本軍らしい姿を見つけると、迫撃砲隊に知らせる。すると、迫撃砲弾が撃ち込まれる。これも、心理的に我々を苦しめていた。

七月三十日から、九月十日まで、ほとんど食料が無くなってしまった。我々は、目まいがしたり、下痢をしたりした。また、皆で集まり、猿の食べ物を食べれば何ともない、心配はしなくていい。と、そんな物を食べながら、土民のカボチャ・芋や莖をたべながら生き長らえていた。

そのうち、連合軍との連絡がとれるようになり、日本が無条件降伏をした。軍から正式に降伏すると命令が来た。各隊は、逐次、連合軍に降伏し、抑留生活に入ったのである。

いずれにしても、フィリピンでの戦没者は、五十万

人と、今次大戦で最も多い地区であった。私は二十六歳で召集され、台湾沖で、米軍の魚雷攻撃を受け、幸いにして死からまぬかれた。その後、フィリピンでも同様に死から免がれ、現在八十三歳でも健在で、恩給欠格者救済に努力していることは幸いであると思っている。

北部ルソン（比島）

激闘の盟兵団

秋田県 田 口 隆 成

私は大正八（一九一九）年秋田県生まれ、昭和十五（一九四〇）年二月、歩兵第十七連隊留守隊入隊しました。同三月、満州第十七連隊へ移動。同十六年八月、奉天（瀋陽）陸軍予備士官学校を卒業しました。同十八年九月、弘前旅団司令部副官として勤務。同十九年六月、独立混成第五十六旅団（盟兵団）を編成、同月二十七日、宇品港出帆。同七月十五日、比島マニ

ラに上陸し、リンガエン湾正面に布陣しました。

以上が私の略歴ですが、戦場の第一線にいて、敵の上陸する真正面にいました。相手を殺さなければ自分が殺される。これが我々が真正面から対面した戦場の姿でした。命令されたことが正しいことだと私たちは信じました。敵も恐らくそう信じて凄惨な戦闘を繰り返した訳です。激突して幾度となく繰り返し返した。お互いに国を守り、私たちが国民を守るために、その戦場の真っ只中にいた訳です。

私は独立混成第五十六旅団（盟兵団）が編成されフィリピンへ行きました。その時は将校として私一人、下士官二人、兵隊が四、五人おりました。そして弘前の一個大隊、秋田の歩兵一個大隊、ほか野砲一個大隊、砲兵一個中隊、というようなもので編成された訳です。旅団長は水戸の連隊長をやっております佐藤大佐で、この方は山形の鶴岡出身でした。そして弘前に来られて、すぐ編成して弘前を発ったのです。要するに、その時の状況というものは、各大隊ごとに広島に